

犠 牲

(一) 暗闇の活動

試に社會を一つの劇場に譬ふる時。其處に我等技術家は其舞臺を踏むで華やかに立舞ふ役者では無い、棧敷や土間や三階に陣取つてその見物を樂む看客でも無い、無論制服制帽

に、か、つ、い、面を突出す取締りの警官でも無い、仕切場の帳付けてもなければ、客案内の出方でも無い。賣店の小僧でもなければ、下足番の阿爺でもない。脚本提供の作者でも、振付けの師匠でもなければ、出語りの太夫でも、下座の囃子方でもない。が、其處に一ト幕の閉ぢるが否や舞臺の上を駆廻つて世話しげに次幕の屋臺を組み、背景を吊るし、丘や小川や藪や柴折戸の書割を曳摺り、行燈や床几や座蒲團の小道具を並べて廻る處の所謂道具方なるものが、不思議と我等が専門に似寄つた役目を持つては居ないか。彼の奈落の底の暗闇で廻り舞臺をふんまはす手合の如きも、それは恐らく局面打開の

大任務を背負ふて偉大なる技術的手腕を發揮するものとも云へやう。

無論此頃は道具方とてなか／＼馬鹿にしたものでは無い。興行の都度差換へ引換へ大道具大仕掛けの新を競ひ奇を争ふて、只管見物の眼先を變へねばならぬ。殊に近來電氣流行の時節柄とて、舞臺面の意匠に、色彩に、明暗に、それ／＼千變萬化の妙を凝して、眼醒むる許りの新趣向に、看客の大喝采を買はねばならぬ。斯道多年の勞功者が首を捻り智慧を搾つて尙且つ及ばぬ所は直ぐ様例を外國の興行にまで覓めて、それもせつせと輸入せねばならぬ。其處に渠等道具方としての

随分の苦心もあれば又相當の愉快も存する譯ではあるが、併し何しろ其一切の仕事が他所からは知られぬ幕一重彼方の暗闇での活動である、其一切の効果が唯他の凡ての脚色に興味を添えしめんが爲めばかりの添景である。況やその折角の苦心と得意とを買つて呉るゝ程のものは、畢竟樂屋内の同じ手合ひでなければ、恐らく餘程の見巧者若くは好事者たるに過ぎまい。場内の他の凡ては只湧立つやうな人氣に酔ふて、陽氣に愉快に一日の興を遣りつゝ、兎もすれば幕間の餘りに長きを呟いて、道具方の手際を罵らうとするのではないか。餘所目からは知られぬ暗闇の辛勞に、油汗を搾つて、只管他の

凡ての爲めに興味あらしむべく、其生を削り、其身を疲らしつゝある渠等が名の、それが道具方が、將た技術家か。幕間の興へられたる幕間の切詰めた時間を測つて、手際よく大道具小道具一切の埒を明けたり。うまいきつかけを圖つて舞臺を廻したり、書割を差替へたり、紙の雪を降らせたり、宙釣りの紐を引いたりする。その呼吸のしつくりと揃ふ間は誰もが道具方の存在などを氣にすることは無いが、然かも萬一少しの間誤付きからして舞臺に穴を明かさうものか、それを初めて我道具方の一齊に顧みらるゝ時で、同時に氣色ばむだる満場から矢庭に其不手際の叱責せらるゝ時である。が、そ

れも任務とあれば是非もなからう。たゞ夫れ我から望むて華やかなる舞臺を餘所に斯かる幕間の薄暗がりに我を没し我を忘るゝ人となるには抑も我に何れだけ強い覺悟と決心とがあつてのことか。

(二) 拙ない立場

醫者が患者を過まつ。併しそれは決して醫者の不注意からではない、患者の診察を頼み込むだのが既に手後れだつたからである、患者が示された通りの吩咐を嚴格に守らなか

つた爲めである、然らずんば其病氣が所詮不治の惡疾だつたからである。これで世の中は通るゝとして又別の患者を相手に立派に玄關が張つて行ける。

辯護士が訴訟に負ける。それも渠の怠慢と微力の所爲ては無い、何しろ裁判官の偏見が甚しかつたのだ、又は無能だつたのだ、若くは證人の立證が不誠實だつたのだ。これで一切の埒が明いて渠の估券も落ちぬ、又別の依頼者を相手に新たな勝訴の機會を窺へばよい。

學者が學問上の主張を立てる、時には反對者が現はれて是非の論争ともなる。が、何しろ問題が高尙で俚耳に入り易か

らぬと同時に聞けば何方にも一通りの理屈がある。其處で世間は解らぬながらに面白がつて賑はしく嘖し立てる、それに弾みを得ては尙更雙方論駁の花が咲く、若くは能い加減に雙方の深みを見せて交綏する、無理解に感心した連中が只もう雙方ともにえらいものだと賞めて呉れる。後から親切な批評家が現はれて雙方の論點を丁寧に取り纏めて斯かる議論が争はれたと後世にまで残して呉れる。善かれ悪しかれ、其處に學者の學者らしき重みと尊敬とが永く兩者に向つて捧げらるゝ。

但し學者の中でも特に科學者ばかりは、流石に理屈で固めた手堅い一方の眞面目なものとして通つて居る。それでも明日の天氣豫報の間違ふこともあらう、鑛脈の鑑定の外るゝこともあらう、彗星と地球との衝突で嚇かして、先づは御互に御無事で仕合せだつたと後から跋を合はさぬでもなからう。間違ふのも當然である、少しく科學の内容を知り得たものなら、それに兎角を云ふべき筋はないが、世間でも結構をれて通して呉れる豫言し能ふだけでも、流石はえらいと飽迄尊敬して居てくれる。

無論政治家や實業家あたりの言論と來ては、それは何時何んな風の吹廻し次第で主義定見が變るかも知れぬ。が何ん

な場合にしても其主張は立派に物を言ふ煙に捲かれた大勢が只譯もなく隨喜してそれに隨つて行く。

凡ての世の中には何と云つてもこれだけの餘裕がある。他人にも亦常にこれだけの寛恕がある、それが至當でもあり自然でもある。が獨り顧みて我技術の上は如何に。

面白く見入つて居る芝居の最中に、突如電燈が消えても、背景が仆れても、看客は驚破と許りに一齊に湧立つ。電車が無事に進行して居る内こそ格別その存在に想到するものも無かつた運轉手が、不意にブレーキを懸けたりへまに脱線させたら何うである。況や技術家にして其受持つた工作の一部

がまづかつたり、据付けた機械の一部が動かなくなつたり、豫定した丈けの作業の効果が得られなかつたとしたらば何とてある。醫者の誤診にも、辯護士の失敗にも、政策の矛盾にも、千里眼の虚實にも、ハレー彗星の豫言にも、金鑛の鑑定違ひにも、大発見大發明の立消えにも、常に相當の寛恕を忘れなかつた凡ての世間が、此時許りは我後れじと犇めき立つて、怒罵し叱咤し沸騰して、飽迄渠が責任を窮めずんば止まずと息巻くてはないか。成功の名譽は間違ひなく渠のものとは限らねども、失敗の不名譽だけは是非共自分に負はねばならぬ、然かも一生其身に附纏はしめねばならぬ。渠には更に其責任を轉

嫁せしむべきものが無い、別に其口實の持つて行くべき所がない。

此損な道、此拙ない立場を明かに自得して、然かも其定められたが儘の運命に悔むず恨みず、たゞ溫和しく素直に忠實に榮えぬながらも大切なる把手を握つて、寒暑に滅げず風雨に臆せず、雑多の客を乗せつ降しつ、美はしき文化の軌道を平易に且つ安全にと一圖に乗進ませつゝある彼の淋しき運轉手こそはやがて我等技術家の運命たるではあるまいか。それを單なる職業とのみ解するは、無論我等を活かしむべき所以のものではない。又縦しむば職業とした處で其職業に伴ふ

中心生命、其職業に熱と力とを興ふる所以の根本精神、それを何と解釋し理解し將た味徹したものであらうか。

(三) 氣高き標語

技術家が若し技術を以て單なる自己の職業とのみ觀するならば、それは求めて自ら其立場を卑うするものである。其處には當然職業其ものに對する誠意と執着と興味と慾求とを伴ふではあらうが、併し只それだけを以てしては決して技術家自身の見知を向上せしむることは出來ぬ、決して技術家て

ふ團體の意氣を發揚せしむることは出來ぬ、否寧ろ技術其ものをして真から活動飛躍せしむる所以ではない。苟も我等技術家の云爲行動に離乎たる根底があり、其施設經營に高潔なる識見の伴はざる限り、折角時代の要求が生むだ此文明指導の大先達と雖も、實は却て一般社會の願使の下に、只管競々として虐使さるゝ苦境に墮せざるを得ぬ。現に今日世上一般の眼に映する技術が單に新たなる一個の勞作的職業として卑下し蔑視され易からんとする場合、若し自ら願みて我を高うし我を尊とからしむべき所以の操持なくては、我等は空しく不平と懷疑と失望と怨嗟との中に己れを埋み果てざる

を得まい。

然らば則ちその操持とは何か。我等は自己の經驗に於て、幾度か技術家を犠牲^{△△△}の生涯^{△△}として觀せざるを得なかつた。少くとも斯く觀するによつてのみ初めて若干の慰藉と満足と及び敢て挺身努力せんずる意氣を喚起することを得た。又甞めて此意氣によつて強く自ら勵まうとも欲した。曾て讀むだ内村鑑三氏の「後世への最大遺物」でふ書物の中に次の感激すべき一挿話がある。

「今日も船に乗つて湖水(箱根)の向ふまで往きました。其南の方に當つて水門^{△△}がある、其水門と云ふは、山の裾を潜つて

居る一つの隧道であります。其隧道を通つて此湖水の水が沼津の方に落ちまして、二千石乃至三千石の田地を灌漑して居ると云ふことを聞きました。昨日或友人に會ふてアノ穴を堀つた話を聞きました、其話を聞いたときに私は實に悦しかつた。アノ穴を堀つた人は今から丁度六百年も前の人であつたらうと云ふことでござりますが、誰が堀つたかわからない、唯是れ丈[△]の傳説[△]が遺つて居るのでござります。即ち或箱根の近所に百姓の兄弟があつて、誠に沈着であつた。其兄弟が互に相語つて言ふに、我々は此有難き國に生れて來て、何か後世に遺して逝かなければなら

ぬ。それ故に何か我々に出来ることをやらうてはないかと。併し兄なる者は云ふた、我々の様な貧乏人で、貧賤の者には、何も大事業を遺して行くことは出来ぬと云ふと、弟が兄に向つて言ふには、此山をクリ抜いて湖水の水を取り、水田を興してやつたならば、それが後世への大なる遺物ではないかと云ふた、兄は、それは非常に面白いことだ、それではお前は上の方から堀れ、己は下の方から堀らう、一生涯掛つても此穴を堀らうじやないかと云ふて堀り初めた。それで何う云ふ風にしてやりましたかと云ふと、其頃は測量器械も無いから、山の上に標を立て、兩方から堀つて往つた

と見える。それから兄弟が生涯かゝつて何にもせずには……多分自分の職業になる丈けの仕事はしたでござりませう。兄弟して兩方から毎年々々掘つて往つた。何十年でござりませうか、其年は忘れなければ、下の方から掘つて来たものは、湖水の方から掘つて往つた者の四尺上に往つたさうでござります。四尺上に往きましたけれども、御承知の通り水は高うござりますから、矢張り龍吐水の様に向ふの方に能く落ちるので、生涯掛つて人が見て居らない時に、後世に事業を遺さうと云ふ所の奇特の心より、二人の兄弟は此大仕事をなし遂げました。人が見ても呉れ

ない寝めても呉れないのに、生涯を費して此穴を掘つたのは、それは今日に至つても我々を勵ます處の業ではありませぬか。それから今の五ヶ村が何千石だか何れ丈け人口があるか忘れましたが、五ヶ村が頼朝時代から今日に至るまで年々米を取つて來ました、殊に湖水の流れる所でありませぬから、早魃と云ふことを感じたことはござりませぬ。實に其兄弟は仕合せの人間であつたと思ひます。若し私が無にも出來ないならば、私は其兄弟に眞似たいと思ひます。これは非常な遺物です。多分今往つて見ましたならば、其穴は長さ多分十町かそこらの穴でありませうが、其頃

は煙硝もない、ダイナマイトもない時でござりましたから
アノ穴を掘ることは實に非常なことでござりましたらう
云々。

自分には曾て讀むだ此一小話が何時迄も頭にしみ付いて
居て、自己の身邊に不平や不満を感ずる折々不圖思ひ出して
は自ら慰むよすがとなつた。彼の湖畔の無名の兄弟が志し
たるものは功名には非ずして却て犠牲[◎]そのものではなかつ
たか、然り犠牲[◎]實にも氣高き犠牲[◎]、これあるによつて渠等の淋
しき働さに大きな意味が現はるゝてはないか。我等技術家
が技術家として眞に活きるの道は矢張此の氣高き尊き犠牲[◎]

の精神に其一身を抛つ所にあつて存するのではないか。若
し此點に趣味し自得せずして技術家たらんは、之れ却て徒ら
に自己を懊惱と煩悶との餌食に亡ぼすものではないか。

我等は疊に社會を一の劇場[△]に譬へた、其比喻にして若し甚
しく失當ならずんば、則ち彼の我から求めて舞臺裏の暗間に
踞踞し、大道具小道具の淋しくも引立たざる任務に打込むで、
一意舞臺面の美々しかるやう目覺しかるやう、さては看客の
興味を殺がざるやうとの苦心に慾得もなく駆廻る、其一片の
熱誠に我から好むで活きる技術[△]の生涯[△]は是れを犠牲[◎]と呼ば
ずして何とかせう。

乃ち思へらく、技術家とは是れ現代の科學的文明を益々世界に光被し宣傳し、及び助長し啓發せしめんが爲めに、却つて自ら甘んじて一世の犠牲たるべく自覺し挺身し得たる勇者のことである。然り、犠牲、此二字の如何に尊嚴にして神聖なるぞや。如何に高潔にして仁俠なるぞや。史に見る幾多の仁人義士の誰かは能く甘んじて當時の犠牲たるを忍びし者に非ざる。渠等は能く自ら進んで一世の犠牲たりしが爲めに、然かく偉大である。我等も亦敢て甘んじて現代文明の先驅たり犠牲たるに於て、即ち無名の偉人たるべきではないか。技術家の唯一の誇りは、此處にある。技術家の唯一の慰藉

も亦此處にある。即ち以て其意氣を試むべきではないか。此の如きは之れ我等が窺に觀じて是なりとする一個の信條である。苟も技術界に人とならざりし以前ならば知らず既に一個の技術家として生ひ立てる以上、此高潔なる信念の力を以て、我行動を律する以外に、我専門を偉ならしむべき途はないと、今も自分は思ふて居るのである。「我死骨にして朽つれば青史にも亦名無きを歎じた陸放翁の恨みは、兎も角、我等は此崇高なる意義によつて導かれたる若干の遺業を後世に傳へねばならぬ。縦しむば微力の及ぶ所が僅かな事績に止まるとするも、亦以て比隣若干の人々の間に幾十年かの

利便を現實に提供し、併せて當代の物質的文化に一歩たりとも普及の途を啓きしことを思へば、則ち我存在の意義と衷心の満足とは以て償はるべきである。

四 無限の消極

夫れ然り、然かも尙且つ退いて之れを考ふる時、技術家の本意を以て一に犠牲の精神に活くと爲すの、そは又餘りに物淋しく味氣なき所以たるではあるまいか。我等の意氣はそれによつて大に引締まり、我等が不平は爲めに頗る怡和さるゝ

ではあらうが、然かも能くそれに自得し徹底せんが爲めには、殘念ながら我等は最早餘りに現代的である、餘りに時代思想の感化を受けて居る。即ち其制して制し切れざる自我のさくやきに聞けば、結句はこれも一種の諦らめたるに外ならざる憾みがある。うき我を淋しがらせよ、閑古鳥、淋しき技術家の境涯を尙更淋しいものだと悟らしむるはよいが、さらば何故我等だけが殊更其淋しい途を行かねばならぬか。他の低級な卑屈な悟りや諦らめに比して、これは頗る氣高き深味ある諦らめではあるが、然かも其諦らめたるに於て何れぞ。即ち以て現に技術家たる我等を救ふに足るとしても、それが

將來斯界に投せんとする今の若い人達を如何に満足せしむべきかは大なる疑問である。

詮する所、犠牲の觀念は技術家に對する無限の消極的立場である。が、無限の消極はやがて無限の積極に相隣りすることを思はゞ、それが結局は窮極に於て同一義に歸着するかは知らぬが、兎に角同じことなら成るだけ積極的に手強き意義あり權威ある技術の本領如何を叩いて、以て我等が英氣を鼓舞し雄志を喚發せしめたいではないか。其處に最後の疑問がある。未練かも知らぬが此際尙突込むでこれを尋ねて見ばならぬのである。